

# 『失われた時を求めて』における 「母」のテーマ

村田知子

## I 序

### I-1 話者の位置

プルーストにとって「母」が重要なテーマであることは広く認められているが、作品中に現われたこのテーマを正面から扱った研究は意外に少ない。どうやら読者の多くが話者と母の関係の中にプルースト自身の母への固着を見、それを彼の同性愛の原因だと考えているようだ。しかし話者が異性愛者として描かれている以上、そのままなおに読まなければ小説の意味をとりちがえることにもなりかねない。いかに作者の伝記と主人公の人生の重なりが大きくても、プルースト＝話者ではないのだからこの二者は分けて考えなければなるまい。従って話者は決して同性愛者ではないことを、ここでまず再確認しておく必要がある。その上で、プルーストが自分の経験を材料にして作品を書きながら、なぜ主人公を同性愛者として描かなかったのかという疑問は当然生まれてくるだろうし、それに対する十分な答えはまだ出されていないように思われる。

作者の伝記に引っぱられて作品を解釈してしまう危険は、プルーストの場合常に存在している。例えば個々の作中人物、作中の出来事のモデルを作者自身のまわりで捜し出そうとする試みがある。これはもちろん必要な研究であり、作家がどのように材料を採集し、それを改変、再構成したかを明らかにしてくれる。しかしモデル捜しが作家の創作の秘密を明らかにしたとしても、作品の意味付けまではしてくれない。この場合研究者は作家の側から作品を見ており、読者の側から見える作品像には目を向けていないからだ。

また反対に、作品の分析から作家の内面を明らかにしようとする方向もあるが、これも別の意味で作家の伝記に引きずられているのかもしれない。精神分析的な方法を使って作品の中から作家自身のコンプレックスを引きだそうとする際には、繰返し現われるテーマ、イメージ、エピソードの分析を中心に据えることが多い。こ

の場合細分化された部分のなかからあらかじめ想定されたコンプレックスを探り出すことが多く、作品の全体像はあまり問題にされない<sup>1)</sup>けれども文学作品は一つ一つが完結し、それぞれ何らかの意味を持っていると考えるべきではないだろうか。その意味を明らかにするためには作品の軸となる流れを追う必要がある。作品と作家の関係を問題にするのはそのあとの作業であろう。

『失われた時を求めて』（以下『失われた時』と省略する）の場合、全編を貫く流れとしてまず考えられるのは、「時」と「探究」という二つのテーマである。プッチット・マドレーヌの体験からゲルマント家のマチネまで何度か繰り返される「特権的瞬間」を通じて話者は事物の本質をつかもうとし、同時に物を変質させる「時」の力の大きさを知る。あるいはドゥルーズが「シーニュの習得」という概念で示したように、プルーストの認識論をそこに汲みとることもできるし、決して楽観的でない恋愛観を読みとることもできる。いくつかの可能性はあるにしろ、この長い小説の全貌を捕えようとする時我々を導くのはこのような抽象概念である。従って話者の人生を軸とするこの物語の中で読みとられる話者の成長は、思想的な面だけに限られてしまう。

しかし話者の心理的な成長も全体を貫くテーマとして忘れてはならない。話者は母への依存が非常に強い少年として登場するが、この傾向は不変ではなく、彼の心理的成長は主に母への態度の変化として現われると考えられる。ただ母は第二巻第二部に入るとほとんど現われなくなるので、両者の関係を続けてたどるのは難かしい。このことは他の登場人物の場合も同様で、彼らは入れ代わり立ち代わり現われるので一人一人の持つ意味を捕えるのは簡単ではないし、話者との関係を全編を通して考えることが有効な場合ばかりではない。けれどもそれらの人物たちの中にいくつかの群、言いかえれば話者との関係を規定する共通の要素を持った人々の集まりを想定することで、この一見無秩序な状態をある程度整理することができよう。例えば貴族、ユダヤ人、芸術家、同性愛者、恋人、母などである。登場人物たちはいくつかの要素を合わせ持っていることもあるが、共通の要素によって人物群を仮定し話者との関係の変化を検討してゆけば、物語全体の流れをとらえるのに役立つと思われる。

## 【一2 「母」のテーマの変遷

すでに述べたように母はプルースト、あるいは話者にとって非常に大きな存在である。初期の短篇集『楽しみと日々』では母は離れたくないが離れなければならな

い存在であり、その「序文」や「ある少女の告白」では母への愛着と母から引き離される悲しみが描かれる。「バルダサール＝シルヴァンドの死」や「ある少女の告白」に見られる結婚失敗のテーマも、主人公たちが母からの独立を果たそうとしてできなかったと考えることができる。この時期に描かれた主人公たちはどのような年令に設定されていようと、精神的にまだ母から自立できていない人物として登場する。

この時期には主人公の親に対する直接的な反抗というテーマは見られない。しかし『ジャン＝サントウイユ』（以下『ジャン』と省略）になると、主人公がまるで反抗期に入ったかのように激しく両親に逆らう。例えば恋人マリーに会いに行くのをジャンに禁じようとする母に対し、ジャンは半狂乱になって抵抗する。レヴェイヨン家での夕食に母が反対した時にも、母のヴェネチアグラスを割り狂態を演ずる。これらの対立はジャンが異性と親しくなろうとするのに母が反対することからおこる。また一方でこの親子は「ジャンと母」の断章に見られるような、ほとんどエロチックと言っていいほどの親密な関係を保っている。この作品は未完に終わっているので、ジャンと母の関係が彼の成長とともにどう変っていったのかははっきりとはつかめない。しかし残された断章を見る限り、ジャンは両親に対し一貫してかなり暴君的に振るまっている。母に対して深い愛情を持つ一方、自分の意志が通らない時には激しく反抗する。どうやら彼にとって母とは自分にかなり近く、自分の思いどおりになるはずの存在であるようだ。この親子関係は幼児と母のそれを思わせる。ジャンはあたかも母の胸に抱かれながら、気に入らないことがあると泣いて自分の欲求を通そうとする幼い暴君のようにふるまう。母の態度もその裏返しでジャンに対してあまり距離をとらず、自分の支配下に置こうとする。次の作品『サント＝ブーヴに抗して』でも、親と子の親密さは変わらないようである。

『失われた時』になると、母と子の関係はかなり弱まり、話者が母への強い愛情と反抗を見せるのは、コンブレーでの就寝の悲劇とヴェニス旅行の時だけである。第二巻の途中から母の姿は消え、祖母がその役割を肩代わりする。祖母が死にバルベックに滞在中の彼のもとに母が来るまで、話者の関心は母よりも祖母に注がれている。これらのことから、母のテーマは表面上『ジャン』よりも弱くなったように思える。しかし「母」のテーマは力を失ってしまったわけではない。祖母は母と同じく話者を保護するという役割を果たしているのだから、二人が一つの「母」グループを形成していると考えられる。この「母」グループを想定してみると、母のテーマは『失われた時』の中でそれまでよりもむしろ広がりを持っていることがわ

かる。そこには祖母の姿を借りて「母」についての重要なエピソード、「母」の死が書き加えられているからだ。「母」の死という大きなテーマを組み入れたことで、『失われた時』の「母」はそれまでプルーストの描いて来た母と大きく違って来たのではないだろうか。

「母」グループと話者との関係の変化を追ってみるとおもしろいことがわかる。最初話者のそばにいた「母」は徐々に彼から離れ、次第に存在が薄れてゆき、ついには亡くなる。するとその動きに呼応するように、彼の恋人や憧れの女性との接近が可能になるという現象がおこっているのである。『ジャン』では母子の争いはジャンが異性に近づこうとする時におこったが、『失われた時』でも同様に、「母」グループは話者の憧れの女性たち、言わば「恋人」グループと対立していると考えられよう。ただ、『ジャン』では親子げんかという激しい形をとっていた「母」と「恋人」の対立は、『失われた時』ではあまり表面に出ずに物語の底に常に存在するテーマとなっているようだ。このような視点によって『失われた時』の「母」像をとらえ、作品の分析を進めていきたいと思う。

以上のように各作品における母と主人公の関係をたどってみると、そこに大きな変化がおこっていることがわかる。これはおそらくプルースト自身における「母」像の変化を写しているのだろう。『楽しみと日々』の主人公たちは母にまったく依存し、母からの独立という義務を敢行できない。『ジャン』では息子の母に対する強い愛情と憎悪が描かれている。それに対し『失われた時』では話者と母の距離が大きくなったように感じられる。これは自分の母の死を体験したあと作家自身にとって「母」のイメージが変わるとともに、自分と母の関係を客観的に見るようになったことを意味すると考えることができよう。

## Ⅱ 「母」対「恋人」

### Ⅱ-1 コンブレー時代の二つの欲求

話者が少年期の休暇を過ごすコンブレーはレオニーおばの家という核を持っている。そこでは子どもは話者だけであとは父母、祖父母、おばなど年上の身内の人々であるから、この人々を「親」グループと考えることができよう。家の持主であるレオニーおばは病気のために外出しなくなっているのでまさに家の中心、「主」だと言えよう。従ってコンブレーの「家」とは「親」グループ、それも女性である「母」

グループが支配する場所である。この点で話者の憧れの的となっている家の外、コンブレー近郊とはまったく異質である。

この時代話者の生活の中心は「家」にあるが、周囲の土地を散歩することは話者の大きな楽しみとなっている。そこは話者の夢の中で憧れの女性たちと結びついている。メゼグリーズの方はジルベルトや他の娘たちに、ゲルマントの方はゲルマント夫人にという風である。母の支配する家の中と憧れの外の世界という対立は、話者が持っている二つの相反する欲望に対応している。家にいることは母に保護され愛されたいという依存の欲求につながり、外の世界へ出てゆくことは母の支配を逃れて恋人たちを愛したいという独立の欲求を意味する。しかしこれら二つの欲求を同時に満たすことはできず、話者は「母」への欲求と「恋人」への憧れの間で大きく揺れ動いている。

これら二つの欲求はこの時代話者の中で不思議な均衡を保っている。昼の間「恋人」たちや外の世界への憧れが話者の心を占めているが、それは日暮れと同時に母に付添われて眠りたいという強い願いによって書き消されてしまう<sup>2)</sup>話者がこれら二つの矛盾する欲望を持ち続けることができるのは、どちらの欲望も十分に満たされることのないからである。母への欲求が禁じられていることは「就寝の悲劇」というエピソードがはっきり示している。母が話者のベッドに来てくれるのはただ一度の例外的なできごとであり、彼の母への強い執着が公認されたわけでは決してない。また「恋人」たちへの欲求に関して、彼は遠くから彼女たちの姿を眺めるだけで接近することはできない。母への全面的な依存を禁止された話者は、幼年期の殻をつけたまま外の世界へ目を向けはじめているわけだが、二つの欲求を持ちながらどちらも実現できないコンブレー時代は、いわば夢の時代となっている<sup>3)</sup>

家が「母」の支配する場所、周囲の土地が憧れの場所だとすると、家から出て散歩に行くことは「母」のもとを逃がれて「恋人」へ接近することを意味する。しかし普段の散歩は家族づれであり、話者は母から解放されないで「恋人」たちに近づくことはできない。ところが話者が一人で散歩する部分では、彼が「母」の力から逃がれ異性に接近を計っていることが読みとれる。ある年レオニーおばが亡くなり、遺産のことで話者の一家はコンブレーを訪れる。この秋話者は一人で散歩するようになり<sup>4)</sup>、モンジューヴァンの沼で気持ちの不思議な高揚を覚える<sup>5)</sup>この部分は話者が事物の中に隠された本質を初めて感じとった瞬間として引用されることが多いが、ここに描かれる話者の興奮はそのような精神的な意味だけを持っているとは思われない。初めて一人で憧れの土地へ行くことが異性への接近と等しいことは、若

い百姓娘と親しくなりたいという話者のこの時の夢がよく示している。またこの一人だけの散歩がレオニーお婆の死の直後に置かれていることから、「母」の一人である彼女の死が「母」の支配力を弱め、話者に「恋人」への接近の可能性を与えたと考えられる。けれども結局、話者の母への愛着はコンブレー時代を通じて衰えることなく残り、話者は「恋人」たちに心ひかれながらも親しくなれないままに、夢にふけることで心を紛らすのである。

## Ⅱ-2 話者にとっての「母」と「恋人」

以上のようにコンブレー時代の話者は母への依存と母からの独立という対立する欲求を持っているが、このことはプルーストの描く多くの主人公たちを特徴づけている。例えば『楽しみと日々』の序文でプルーストはノアの箱舟の神話について書いている。幼い時「私」は、大洪水で長い間箱舟に閉じこめられるノアをかわいそうに思う。ところが少年期になると、まったく違った解釈をするようになる。病気で寝ている時の自分をノアになぞらえ、健康が回復して母のそばを離れる悲しみを、箱舟を離れるノアの中に読みとる。幼少期の「私」がノアを哀れに思うのは、彼が箱舟という閉じた世界、つまり母の保護あるいは支配のもとで暮らすのに飽きているからであり、少年期の「私」はもはや母への全面的依存を許されないので、外の世界へ戻らなければならないことを悲しく思う。

ここに描かれた箱舟のイメージが示すように、「母」とは即ち子どもを包みこむ存在である。「母」は外界の危険から子どもを守るが、同時に子どもを束縛し閉じこめてしまう<sup>6)</sup>子どもにとっては自分の欲求がすべてであり、それを枠として母を規定する。彼が必要とする時に求めたものを与え守ってくれる母、いやなことは何も強要しない母が理想だと言えよう。つまり幼児は必要なときにはそばにいて欲求を満たしてくれ、あとは自由に行動させてくれる母を求める。

プルーストの主人公たちに共通なのはこうした幼児の論理であるが、『失われた時』の母はもはや優しいだけの母ではない。彼女は自らを話者に禁じ、一人で眠ることを強要する。話者にとってコンブレーは決して樂園ではない。コンブレー時代の話者と母の間には既にいくらかの心理的距離がある。母を禁じられた話者は一方で母との同化状態へ戻りたいと望み、また他方で母の支配を逃れ、興味の導くままに外の世界へ出てゆこうとする。

「母」がこのように具体的に身近な存在であるのに対し、「恋人」は話者の憧れを具現する存在である。憧れの内容はさまざまであり、例えばその女性の持つ若さ

であったり貴族の血筋であったりする。憧れとは未知のものを知りたいという気持ちであるから、話者は謎の部分に引かれて女性たちへの接近を計る。しかし実際に近づいた時には想像と現実とのギャップから幻滅がおこる。話者の恋愛では、憧れの女性に近づけると期待している時が最も幸福な時期だと言えるかもしれない。なぜなら現実に関係に入った時、女性の中の未知の部分は消えず、今度は疑いの母胎となって話者を苦しめるからだ。恋人が疑いや嫉妬を生み出す存在になると、話者の中に二つの欲求がおこる。一つは彼女の中の未知の部分の消すためにもっと接近したいという欲求であり、もう一つはもはや苦しみの種でしかない彼女と別れたいという欲求である。

このように、「母」も「恋人」もあるときは話者の心を引きつけ、あるときは反発をひきおこす存在である。従って話者は「母」と「恋人」という二つの極の間で揺れ動くのである。

### Ⅲ 「母」の力

#### Ⅲ-1 「母」の支配

第一巻第三部で「母」の土地コンブレーからパリへ移った話者は、若い女性たちへの接近を開始する。話者がそれまでの「母」と「恋人」への欲望の均衡状態から抜け出せたのは、母からの独立が話者にとって第一の義務とされているからである。<sup>7)</sup>コンブレーを出てしばらくは話者はまだ母を求めており、話者の関心が若い女性たちに向けられるためには周囲の人々による「母」の禁止が必要である。「土地の名：名」で禁止されるのは、ヴェニス旅行とラ＝ベルマの演ずる「フェードル」である。これらは話者が強く望んでいるものであり、そこには「母」のイメージとの深いつながりが感じられる。ヴェニスは話者が後に母と二人で訪れる土地であり、またフェードルは義理とはいえ息子を愛し苦しむ母親、激しく息子を求める母のイメージを表わしている。春休みに計画されたヴェニス旅行を前にして話者が発熱すると、医者はこの二つを禁じ、代わりに子どもたちの集まるシャン＝ゼリゼで遊ぶことを勧める。<sup>8)</sup>話者はそこでジルベルトと知りあうと、今度は彼女に夢中になる。この時話者は医者によって母から恋人への方向転換を強いられるわけだが、一度向きを変えると今度は急速に恋人の方へと引きつけられてゆく。

シャン＝ゼリゼに通い始めた話者は、彼女に会わずには生きられないと考えるよ

うになる。<sup>9)</sup> 祖母が車にひかれることよりジルベルトに会えなくなる方が重大だと思える。ところがこの段階ではまだ「親」あるいは「家族」の支配力が強く残っており、話者のジルベルトへの愛情はスワン氏やオデット、スワン家の客ベルゴットへの興味を生み出し、やがてスワン家自体への関心へと収斂することになる。

「花咲く乙女たちのかげに」第一部に入っても「母」のイメージの力は強く、ジルベルトが遠ざかると話者は「母」の方へ引戻される。例えば冬休みにジルベルトに会えないでいる話者の気を晴らそうと、母がラ＝ベルマのフェードルを見にゆくことを許可する。<sup>10)</sup> 話者は「恋人」の不在中に、祖母と共に息子に恋する母の物語を見にゆくわけである。話者はこの時、女優の演技力を認めながらも失望を味わうが、ラ＝ベルマと息子を求める母のイメージを重ね合わせることに失敗したのが彼の失望の原因であろう。実際に舞台を見てラ＝ベルマがフェードルでないにもかかわらず、話者はこの幻想を捨てきれず、彼女のブロマイドの顔に若い男たちへの欲望を読みとる。<sup>11)</sup>

ジルベルトがシャン＝ゼリゼに帰って来ると、話者は再び彼女に夢中になる。ある日話者は、彼女と手紙を取り合って争ううちに性的快楽を味わう。<sup>12)</sup> またこの頃からシャン＝ゼリゼは母親たちに警戒され、子供たちは遊びに行くことを禁じられる。<sup>13)</sup> この禁止は「恋人」への急接近と突然の性的要素の導入が原因だと思われるが、遊びに行くのをやめなかった話者もついには病気になってしまう。

病気で寝ている話者のもとにジルベルトの手紙が届き、これからは家へ遊びに来るようにと告げる。話者は、母がジルベルトにこの手紙を書くよう頼んだのかもしれないと考える。<sup>14)</sup> このことは、一対一の関係がまだ早いので二人がジルベルトの家庭内へ、家族の支配下へと移されたのだと解釈できる。また、母が相変わらず話者と恋人との関係に影響力を持っているとも考えられる。これ以後話者は次第にスワン一家と共に過ごすことが多くなるが、それにつれて二人の心は冷えてゆく。

話者はこの時期、「親」の支配下から逃れられず、「家族」の中にとりこまれて恋人へと到達できないが、「母」からの離脱はやはり進行している。彼はブロックに誘われて売春宿へ行くようになる。また、そこの女将にレオニーお婆の形身を与えたり、ジルベルトにプレゼントを買うために別の形身の品を売ったりする。つまり話者は「恋人」の気を引くために「母」を犠牲にするわけである。

ジルベルトとの恋は終わり、話者の「母」離れは結局果たされない。「母」の力が決定的に弱まって話者が「恋人」へと向うのは、バルベック滞在以降となる。第二巻第二部「土地の名：土地」で話者が若い娘たちの土地バルベックへ出かける時、



母の代わりに祖母が同行する。これ以後祖母は母の代役をつとめ、「恋人」たちの対立項となる。話者がバルベックの若い娘たちに初めて出会うのは祖母がサン＝ルーに写真をとってもらったエピソードの直後であるが、のちにサン＝ルーが明らかにするように祖母の健康状態が悪化するのはこの時からである。バルベック到着直後は祖母なしでは不安でたまらなかった話者は、しばらくすると彼女を必要としなくなる。そして彼が娘たちと親しくなるにつれて、祖母は作品中にほとんど姿を見せなくなる。

バルベックでの娘たちへの接近と祖母の消滅、この二つのことは決して無関係ではない。話者の言葉どおり、「若い娘たちが祖母の存在を隠して」<sup>15)</sup>いるのである。このことから、話者の「母」への依存がどの程度弱まっているか、逆に言えば「恋人」たちにどれ程心ひかれていたかを示すために、プルーストが祖母の病気を意図的に使っていると推測できるのではないか。

話者は娘たちの一人、アルベルチヌと親しくなり、ついにはホテルに一人でいる彼女を訪れるまでになる。祖母が病気になる姿を消したことで話者は「母」から解放され、孤児であるアルベルチヌのおばも不在であったことから、二人の接近が可能になったと考えられる。しかし「恋人」との接吻は結局許されず、話者は祖母の死後になってようやく望みを達することができる。

「母」からのこうした自立の可能性は、バルベックへの旅の途中で予告される。祖母は途中で友人宅に泊まり、話者は一人で車中の人となるが、見知らぬ場所で孤独に夜を過ごすのにもかかわらず安らかな充足感を味わう。<sup>16)</sup>翌朝、彼は山の駅で見かけた牛乳売りの少女に心を奪われる。<sup>17)</sup>彼女は太陽のように光り輝いて見えるが、もう少しのところで彼女に近づくことはできない。このエピソードはバルベックで話者が「母」への依存から脱し、「恋人」の方へ強くひきつけられてゆくことを告げる。またこの少女の輝く姿はバルベックで「恋人」の力が強まることを示していると言えよう。

以上のように最初の二巻を通じて、話者は「母」の支配力から逃がれようとする。コンブレーからパリ、バルベックと話者が移動するたびに「母」との距離が広がってゆくが、彼が完全に「母」から自由になるためには、祖母の死を体験する必要がある。

### Ⅲ-2 祖母の死

「ゲルマントの方」に入ると、話者の「恋人」への接近はその対象をゲルマント夫

人へと移しながらも続けられてゆく。その動きと平行して祖母の病気は悪化の一途をたどり、ついには亡くなってしまふ。この巻は話者一家がゲルマント家の館に付属したアパートマンに引越したことから始まるが、転居の理由が実は祖母の病気であることが示される。

Or, il est temps de dire que celle-ci [=notre nouvelle maison] — et nous étions venus y habiter parce que ma grand'mère ne se portant pas très bien, raison que nous nous étions gardés de lui donner, avait besoin d'un air plus pur — était un appartement qui dépendait de l'hôtel de Guermantes.<sup>18)</sup> (カッコ内は筆者)

この文の構造は、引越しを手始めとするゲルマント家への接近と、祖母の病状とが密接な関係にあることを示している。ここではゲルマント家に接近することが祖母の健康のためであるように書かれているが、読み進むうちにむしろ反対であることがわかる。

この引越しで話者とゲルマント夫人の距離は少し縮まる。彼女への接近は既にバルベックでヴィルパリジ夫人やシャルリュス、サン＝ルーなどと知り合うことである程度準備されて来たが、ここで話者自身が初めて彼女に近づくことができた。しかし近所に住んでも身分差は越えられず、彼女と同等の身分、即ち貴族社会の人に紹介されなければ彼女と本当に親しくすることはできない。この身分差がはっきりした形をとるのは、話者が再びラ＝ベルマの「フェードル」を見にオペラ座へ行ったときである。棧敷席にはゲルマント公爵夫人、ゲルマント大公夫人を頂点としたフォーブル＝サン＝ジェルマンの貴族社会の縮図が見てとれるが、話者自身は平土間から憧れの社交界を眺めるだけである。

話者とゲルマント夫人の接近は「母」によって二重に阻まれている。なぜなら彼女はまず「母」に対立する「恋人」の一人であり、また貴族社会の一員であるからだ。すで見たようにコンブレー時代の部分から「母」と「恋人」の対立が現われているが、そこにはまた、ブルジョア階級と貴族との交流を認めないカースト的な考え方が見られる。例えばスワンが貴族たちと親しいことはコンブレーの話者の家庭ではまったく無視され、否定されている。大おぼは知りあいの公証人の息子が王族と結婚すると交際を絶ってしまうし、<sup>19)</sup> 祖母は貴族だからといってヴィルパリジ夫人にいい評価を与えない。これらのことから、「母」が話者の貴族社会接近を阻む

存在であることがわかる。

これらの障害を前にして話者はまずゲルマント夫人に自然に近づく機会を作ろうとするが成功しない。彼は次に彼女の甥サン＝ルーを通じて接近を計る。彼の勤務地ドンシエールで話者は歓待され、パリに帰ったらゲルマント夫人に紹介するという約束をとりつける。一方で「恋人」への接近を準備しながらも、話者は同時に祖母の健康を気づかっている。ある日祖母から電話がかかるが、かすかに聞こえるその声は話者から引き離された不安と孤独を伝え、死をも予感させた。話者が急いで帰宅すると祖母の様子が一変している。

[ . . . ] j'aperçus sur le canapé, sous la lampe, rouge, lourde et vulgaire, malade, rêvassant, promenant au-dessus d'un livre des yeux un peu fous, une vieille femme accablée que je ne connaissais pas.<sup>20)</sup>

話者がサン＝ルーからとりつけたゲルマント夫人への紹介の約束によって「恋人」で「貴族」でもある彼女との距離が短縮されたので、反対に祖母との距離が拡大し彼女を衰弱させたのである。

話者をゲルマント夫人へと導いてゆくのはサン＝ルーの役割であり、彼がパリに戻るまで話者は彼女に会うことができない。サン＝ルーが休暇でパリに戻った日に話者はヴィルパリジ夫人のサロンを訪れる。この二つが同時におこるのは単なる偶然ではない。貴族社会へ入るためには彼の先導が必要なのである。話者はまず一人でサロンに入ってゆくが、この時言葉を交せるのはブロック、ルグランダン、ノルボワ氏など、以前から知っている貴族階級に属さない人々だけである。ゲルマント夫人は話者の挨拶を無視するほどの冷淡さを見せる。ところがそこにサン＝ルーが到着すると事態は一変する。<sup>21)</sup> 今度は彼女の方から話者に声をかけ、お菓子を勧める。しかしサン＝ルーの仲介も話者と彼女の間のギャップを一度に埋めることはできず、話者は彼女と親しく話すことはない。この日話者が帰宅すると祖母の病状は一段と重くなっている。<sup>22)</sup> 彼女はそのまま寝込んでしまい、ある日散歩中に発作をおこしたあとついに亡くなってしまう。

このように話者とゲルマント夫人の関係の変化を追ってみると、二人が接近するたびに祖母の健康が悪化してゆくことがわかる。話者の「恋人」、「貴族」への接近が母の代役である祖母の存在を圧迫し、ついには死に至らしめる。そして彼女の死は、話者がゲルマント夫人を始めとする「恋人」や「貴族」たちと親しくなる可

能性を開くことになる。祖母の死後、いくつかの大きな変化が起こる。両親がコンブレーに行き数日間不在となるので、話者は両親の支配から解放され自由に行動できるようになる。このことからわかるように祖母の死は「母」の死を意味し、父母の不在は「母」の消滅による話者の「母」からの解放を示している。これによって話者は憧れの存在、「貴族」や「恋人」へ接近することができるようになる。

まずサン＝ルーが手紙で、ステルマリア夫人がパリに来ること、彼女が話者と会う約束をしたことを知らせて来る。彼の手紙は彼女と親密な仲になれるだろうとほのめかしていたので、話者は早速彼女に連絡をとる。<sup>23)</sup>そこへ今度はアルベルチーナが突然現われるが、バルベックで話者を拒んだことを忘れたかのように、彼女はベッドで彼と戯れ、たやすく接吻を許す。彼女が帰ると話者はヴィルパリジ夫人のサロンへ出かけ、そこでゲルマント夫人に出会うが、この時二人の関係が一変していることが明らかになる。ゲルマント夫人は自分から話者のそばへ親しげに近付き、彼を自分のサロンに招待する。この時サロンの客たちの間にゲルマント夫妻の別居の噂が流れており、彼女のこの行為は話者がその原因だという新たな噂を生む。<sup>24)</sup>一方話者の方は、この申し出を受けてもあまり喜ばない。この時ゲルマント夫人は夫と別れてまで話者と親しくなろうとするが、話者は彼女への興味を失っている。これまで話者が彼女を追い求めていたが、ここで関係が逆転するのである。

以上のように、祖母の死後三人の女性が急に話者に近付いてくる。これは「恋人」たちの対立項である「母」が消えて、話者との接近を阻むものがいなくなったからだと考えられる。三人の女性のうち、話者の心を最も強く引いているのはステルマリア夫人であるが、デートの当日になって彼女から断わりの手紙が来る。彼はまるで彼女が死んでしまったかのように悲しむが、その悲しみはすぐに両親が帰って来て彼の自由が制限されてしまうことにも由来している。つまりここで、「恋人グループ」の中心とも言うべきステルマリア夫人が話者から遠ざかると同時に、対立項である「母」が再び力を盛返し、話者のそばへと帰って来るのである。

### Ⅲ-3 貴族社会への加入

祖母の死によって「恋人」への接近は可能となったが、もう一つの憧れである貴族の社交界への加入は、ゲルマント夫人の招待を受けてもすぐには果たせない。話者が実際にゲルマント家のサロンに入ってゆくのは、霧の日々のエピソードの後である。<sup>25)</sup>このエピソードはステルマリア夫人との約束の日を中心としている。彼女と会えずに悲しみに暮れている話者のところへ突然サン＝ルーがやって来て、彼を

食事に誘い悲嘆の淵から救い出す。「恋人」への接近のテーマはここで中断され、霧の夜のテーマが始まる。

「ゲルマントの方」第二部第二章で、作者は霧に大きな役割を与えているように思われる。祖母の死後、パリは霧の季節、秋を迎えている。霧は街を満たし、世界や人々を作り変える。<sup>26)</sup> 問題の日、夜になると霧は一層深くなり、サン＝ルーが来たときには「ナイフで切れるほど」濃くなっている。それはもはやただの薄いもやではなく、危険をはらんだもの、言わば闇の中の迷路あるいは迷宮へと変質している。この霧の中を話者とサン＝ルーはあるレストランを目指して進むが、そこに到着した客たちの言葉も、霧の持つ、冷たく暗く、死の静けさを思わせる迷宮としての性格を明らかにしている。

Robert en arrivant m'avait bien averti qu'il faisait beaucoup de brouillard, mais tandis que nous causions il n'avait cessé d'épaissir. Ce n'était plus seulement la brume légère que j'avais souhaité voir s'élever de l'île et nous envelopper, Mme de Stermaria et moi. [ . . . ] *je me sentis perdu comme sur la côte de quelque mer septentrionale où on risque vingt fois la mort avant d'arriver à l'auberge solitaire; cessant d'être un mirage qu'on recherche, le brouillard devenait un de ces dangers contre lesquels on lutte*, de sorte que nous eûmes, à trouver notre chemin et à arriver à bon port, les difficultés, l'inquiétude et enfin la joie que donne la sécurité [ . . . ] au voyageur perplexe et dépaysé.<sup>27)</sup> (強調は筆者による)

L'un racontait que sa voiture, se croyant arrivée au pont de la Concorde, avait fait trois fois le tour des Invalides; un autre que la sienne, essayant de descendre l'avenue des Champs-Élysées, était entrée dans un massif du Rond-Pont, d'où elle avait mis trois quarts d'heure à sortir. Puis suivaient des lamentations *sur le brouillard, sur le froid, sur le silence de mort des rues . . .*<sup>28)</sup> (強調は筆者による)

この迷路を通して話者が行きついたレストランには貴族たちがよく来ていて、話者がその中に入ってゆくためにはもう一つの段階を経なければならない。この場所にはユダヤ人も来ているが、これら二つのグループははっきり分離されている。貴族は優遇されるがユダヤ人には専用の入口が設けられ、大部屋にしか通されない。話者にとっては貴族階級が社会の上位に置かれ、ユダヤ人は下位に置かれているよ

うに思われるが、このレストランの構造はこうした意識をはっきり写し出している。話者は最初に一人でレストランに入ってゆくが、貴族社会への導き手であるサン＝ルーがいないので、貴族専用の部屋に入る資格がないと見なされ、ユダヤ人の席へ追いやられる。

Or, pour commencer, une fois engagé dans la porte tournante dont je n'avais pas l'habitude, je crus que je ne pourrais pas arriver à en sortir. (Disons en passant, pour les amateurs d'un vocabulaire plus précis, que cette porte tambour, malgré ses apparences pacifiques, s'appelle *porte revolver*, de l'anglais *revolving door*.) *Cette marque flagrante d'ignorance lui fit froncer le sourcil comme à un examinateur qui a bonne envie de ne pas prononcer le dignus est intrare.* Pour comble de malchance j'allai m'asseoir dans la salle réservée à l'aristocratie d'où il vint rudement me tirer en m'indiquant, avec une grossièreté à laquelle se conformèrent immédiatement tous les garçons, une place dans l'autre salle. Elle me plut d'autant moins que la banquette où elle se trouvait était déjà pleine de monde et que *j'avais en face de moi la porte réservée aux Hébreux qui, non tournante celle-là, s'ouvrant et se fermant à chaque instant, m'envoyait un froid horrible.*<sup>29)</sup> (強調は筆者による)

レストランに入るための第一の関門は回転ドアで、不慣れな話者はそこからなかなか抜け出すことができない。このドアは内部の人を寒風から守るが、話者にとってはカッコ内の説明どおり彼を脅かす *porte-revolver* なのである。次に話者を待ちうけるのはレストランの主人で、試験官のように話者には貴族の部屋に入る資格がないことを指摘し、貴族専用のホールから彼を追い出す。話者は絶えず寒風の吹きこむ場所に坐らされ、食事ももらえない。

話者をこの屈辱的な状態から救い出すのはサン＝ルーである。少し遅れて入って来た彼のおかげでレストランの主人は態度を改め、話者を貴族の席に移して貴族の称号で呼ぶようになる。<sup>30)</sup> 大貴族で上客であるサン＝ルーの力で話者はついに貴族の仲間入りをしたわけである。

その翌日話者はゲルマント家の夜会に出かけるが、その時彼はサロンに集まった貴族たちの中で特権的な存在となっている。例えば彼がエルスティールの絵を見て

いる間、他の人々を45分も待たせておくことができる。ゲルマント公爵夫妻のお気に入りとなった話者はゲルマント大公夫人からも招待状を受けとることになる。

このように、話者は霧の夜を境に急に貴族社会へ受け入れられるが、この変化をひきおこしたのは何であろうか。既に確かめたように、この夜霧は一つの迷宮を形成しており、話者はその中へと入ってゆく。迷宮の体験は一般に試練を意味し、その苦しみは自己を大きく変える<sup>31)</sup>。また霧は水の取る形態の一つであるから、その時話者は言わば水中に沈むことになる。水に沈むことは、キリスト教における洗礼の儀式が示すように生れ変わることを意味する<sup>32)</sup>。従って霧の迷宮を体験することによって話者の存在が新しくなり、貴族社会への加入が完了したのだと考えられる。霧は始めから冷たく危険な迷宮を形作っているわけではない。霧のたちこめる屋外へ出た時、話者の心に最初に浮かんだイメージは母の土地コンブレーのものであり、「まぐさおけのようにしめって暖かく聖なる闇」<sup>33)</sup>であった。このイメージは霧の中に入ってゆくことがまず母の胎内への回帰であること、またこの行為が話者の存在の根源的な部分にかかわっていることを教えてくれる。サン＝ルーと共に馬車に乗った話者は、この母胎のイメージから引き出され、冷たく暗く危険な迷宮となった霧の中へ入ってゆく。迷宮の中央に位置するレストランで、話者に貴族社会へ入る資格がついに与えられる<sup>34)</sup>。このようにして霧の夜の隠された筋書きである話者の社交界入りの準備が完了すると、このエピソードは幕を閉じ、サン＝ルーは再びパリを離れる。ドンシエール滞在の頃から話者を「恋人」へ貴族社会へと導いて来たサン＝ルーはその役割を果たし、これ以後話者との仲も疎遠になってゆく。この社交界加入のための儀式とも言うべき霧の体験が祖母の死の直後、両親の不在の間になされたことも一つの意味がある。つまり話者の社交界入りを阻んでいたのは「母」であり、その死が貴族との接近を許したことがそこに読みとれよう。

### Ⅲ-4 同性愛のテーマ

「ソドムとゴモラ」の巻に入ると、同性愛のテーマが支配的になり、話者には周囲の人が急に同性愛者に見え始める。作家自身の問題は別として、このテーマが「恋人」への接近と幻滅のすぐ後に現われることから、同性愛は異性愛への失望を表わしていると考えられよう。また同性愛は『失われた時』の中ではネガティブなものと考えられているから、同性愛者として描かれることは、その人物が持っていた価値を失ったことを示すと考えられる。この巻の第1部でシャルリュスとジュピアンの出会いが描かれ、二人が同性愛者であることが示される。ゲルマント家という

古い家柄の貴族であるシャルリュスが同性愛者としての姿を明らかにしたのは、彼が持っていた価値が失われたからである。前巻で貴族社会への加入を果たした話者が、それまで持っていた貴族への憧れ、幻想を失ったことと対応した動きだと言えよう。

第二部第一章で話者はゲルマント大公夫人のサロンを訪れるが、そこも既に醜悪な状態を露呈している。貴族への幻想を失った話者の目には、シャルリュスが青年たちに誘いをかける様子、ゲルマント公爵が次々に愛人を作っている事などが明らかになる。このようにして貴族社会はその魅力を失い、話者の関心はアルベルチーナへと向ってゆく。

第二部で話者が二度目のバルベック滞在を開始すると、彼の心の中に祖母が甦り同時に母が彼のもとへやって来る。母は祖母の服装や行動をまねることで彼女の地位を継承し、「恋人」と対立する役目を再び担うことを明らかにする。けれども死んだ祖母と同一視されるという状態が示すように、母の力は以前と比べて弱いものでしかない。他方話者はアルベルチーナと親密さを増してゆくが、同時に彼女に対する同性愛の疑いが話者の心に大きく広がってゆく。貴族社会への接近がその魅力を奪ったのと同様、アルベルチーナと親しくなった途端話者は彼女が魅力を失いレスビアンへと変貌するのを見なければならぬ。このような「恋人」の変質は、話者の心を「恋人」から引き離し「母」へと向かわせる。しかし「恋人」は輝きを失いながらも疑いや嫉妬で話者を離さないのだから、話者はなかなか「母」の所へ戻る事ができない。巻末で母にアルベルチーナと別れるように言われた話者は結局彼女と結婚する気になる。それまで「母」と「恋人」の間で揺れていた話者がここで再び「恋人」を選んだわけである。次の巻では母は彼と別れてコンブレーに行き、彼はアルベルチーナとパリでの同棲生活に入る。

「囚われの女」で話者がアルベルチーナと同棲している間、母はコンブレーから帰らない。その間にアルベルチーナへの疑いはだんだん大きくなり、嫉妬に苦しむ話者の心は彼女から離れ始める。そして母のパリ帰還が間近になった時、<sup>35)</sup> アルベルチーナが突然失踪してしまう。<sup>36)</sup> ここで母の帰宅の予告とアルベルチーナの失踪が期を一にして起きているのは二項の対立をはっきり示すものだと言えよう。ところが「逃げ去る女」でアルベルチーナが死んでしまうと話者は彼女のことが忘れられなくなる。一週間以内に帰ってくるという予告にもかかわらず、母が再び姿を現わすのは恋人の思い出がかなり薄れるまで延期される。<sup>37)</sup> 彼女の思い出がほとんど消えてしまった頃、話者はまた母との親しさを取戻し、二人でヴェニス旅行に出か



ける。

以上のように「ソドムとゴモラ」「囚われの女」「逃げ去る女」の三巻を通じて、話者は「母」と「恋人」の間で揺れながらも、次第に「母」のもとへと引きもどされてゆく。そして結局は母との元の親密な関係に戻ってしまうのである。

### Ⅲ-5 ヴェニスへ

母と共に訪れた憧れの土地ヴェニスには、コンブレーとよく似た印象を話者に与えるが、そこにいる話者の心理状況もよく似ている。サン＝マルコ洗礼堂で母が彼を優しくマントで包むことから、母が再び話者を保護しはじめたことがわかる。また話者は時には一人でヴェニスを散歩し、街の風景や娘たちに心惹かれる。一方で母の愛情に包まれながら他方で憧れの土地を歩きまわり「恋人」を捜す。この時の話者の行動様式は、コンブレー時代と同じだと言ってよいだろう。

母の保護がもとのように厚くなると同時に、話者への支配力は再び強化される。母がヴェニスを立とうとすると、話者は反抗しそこに一人残ることを主張する。若い娘たちのいる憧れの土地を離れることは、その土地が持つ「恋人」の可能性を話者に捨てさせることであるから、この話者の反抗は自然な行動だと言えよう。ところが母の力は強大になっており、その支配から脱け出そうとすると今度はヴェニス自体がまったくその魅力を失ってしまう。<sup>38)</sup> 結局話者が折れて母と共にそこを離れることになる。

ここで、コンブレーから続いて来た話者の「母」からの独立の試みは終わる。話者は「恋人」との生活に失敗して「母」の支配下に戻って来たことになる。本来は『捨て子フランソワ』を手本として、「母」からの独立と「恋人」との結婚を目指す試みであったが、その目的は達せられなかった。旅行の帰路、この失敗を埋めあわせるかのように結婚を知らせる二通の手紙が母子によって開けられる。一通はジルベルトとサン＝ルーの結婚を、もう一通はカンブルメールの息子とジュピアンの姪の結婚を告げる。ヴェニス旅行の終わりに告げられたこの二組の結婚によって、話者の遂行できなかった義務を同年代の登場人物たちが代って果たしたと考えることができよう。それゆえに母はこの二組めの結婚を「サンド夫人の小説の最後にある美徳の報酬」としてほめたたえ、結婚の試みに失敗した話者は「バルザックの小説をしめくくる悪徳の報い」と考えるのであろう。

## Ⅳ 結論

最終巻「見出された時」の特徴の一つは、母が完全に姿を消していることである。彼女がまだ存命中であるらしいことは、ゲルマント家のマチネの日母はサズラ夫人のお茶会で不在だったというヴァリエーション中の一節が示しているが、<sup>39)</sup> 実際には登場しない。彼女はなぜ消えてしまったのだろうか。

この巻は話者のタンソンヴィル滞在から始まるが、話者はこの時コンブレーのすぐ近くにいながら幼少期の故郷とも言うべきこの町のことをほとんど考えない。<sup>40)</sup> その代わりコンブレー時代の謎がサン＝ルー夫人となったジルベルトによって次々と解かれてゆく。ゲルマントの方とメゼグリーズの方が実際には非常に近かったこと、ジルベルトがその当時から話者を好きだったこと、ルーサンヴィルの楼閣へ行けば子どもたちの性的な遊びに加わられたことなどである。これらの謎ときは、ヴィヴォンヌ川の水源地が決して地獄の入り口ではなかったように、コンブレー時代の話者の幻想を取り去ってしまう。ここで明らかにされた現実には、コンブレー時代話者が既に「恋人」たちの近くにいたことを教えてくれる。ゲルマントの方とメゼグリーズの方が近いことは、異質なものに思えたゲルマント夫人への憧れとジルベルトへの憧れが実は同一のもの、つまり「恋人」への欲望であったことを示している。

こうしてコンブレー時代の現実が明らかにされると、話者が感じていた「恋人」たちとの距離は彼の頭の中で作られたものであることがわかる。これは話者にとって「母」のイメージがいかに強大であったかを示すものと言えよう。裏がえして言えば、「見出された時」で謎解きがされたのは、話者が「母」の影響下から逃れたことの証拠だと言うことができる。しかしこれまで見たように、第一巻から第六巻までの間話者は「母」から逃れる努力をし失敗したのであるから、話者がそのままの状態でもコンブレー時代の幻想を払うことができるとは思われない。従ってそれまでの話者と「見出された時」の話者の間には大きな違いがあると考えなければならない。それはどのようなものだろうか。

最終巻は話者がすべての幻想から目覚め、真理を発見する場である。従ってそれまでの六巻で骨格の一部をなしていた最大の幻想、「母」対「恋人」の対立も話者の頭から消えてしまった。それだけでなく、話者にとっては母の存在も恋人を得たいという気持さえも消えてしまったように見える。

このように、プルーストは一方で「母」対「恋人」という幻想に翻弄される話者の姿を描き、他方でその幻想から脱した話者の姿を描いている。このことは、『失

われた時』の中では作家自身の感情にかかわる問題であっても、プルーストは決して生のままの形で提示していないことを教えてくれる。『失われた時』の母像と、『ジャン』の母像の違いは、プルーストが自分の体験をもう一度練りなおし、精密な計算のもとに再構成したことに由来しているのではないだろうか。

## 註

- 1) この種の研究の典型としては J. T. Rosasco, *Voies de l'imagination proustienne* Nizet 1980 が挙げられよう。
- 2) ≪ Les désirs qui tout à l'heure m'entouraient, d'aller à Guermantes, de voyager, d'être heureux, j'étais maintenant tellement en dehors d'eux que leur accomplissement ne m'eût fait aucun plaisir. Comme j'avais donné tout cela pour pouvoir pleurer toute la nuit dans les bras de maman! ≫ Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, (Pléiade), 1954 (以下 R. T. P. と略す) I p. 183
- 3) コンブレーで話者が読書に没頭していることがこれを証明している。彼は家の中に閉じこもったまま、書物の力で外の世界へ出てゆき恋や冒険を楽しむのである。
- 4) ≪ Mais je pris ensuite l'habitude d'aller, ces jours-là, marcher seul du côté de Méséglise-la-Vineuse, dans l'automne où nous dûmes venir à Combray pour la succession de ma tante Léonie, car elle était enfin morte, [...] ≫ R. T. P. I p. 153
- 5) R. T. P. I p. 155
- 6) こうした「母」のイメージについては E=ノイマン、福島章他訳『グレート・マザー』ナツメ社 1982 参照
- 7) 『仏文研究Ⅶ』に書いたように、「就寝の悲劇」というエピソードはイニシエーションの儀式という意味を持ち、その中で父は話者に対し母から離れるようにと命じた。母も話者を励ますために『捨て子フランソワ』を与えた、この小説は従来、母との結婚を意味し、話者の近親相姦的な欲望を満たしていると考えられて来た。しかし父が息子イサクを殺そうとするアブラハムの姿で現われ、強く母を禁止したあとに母との結婚が暗示されるとは思われない。フランソ

ワの成長とともに女性の方が母から恋人、妻へと姿を変えると見た方が正しいのではないか。つまりこの本は母と決別せずに心理的成長をとげ、恋人との結婚にまで至った理想的なケースを提示しているのである。これ以後話者は両親のこの勧告に従って母から恋人へと興味を移してゆく。

- 8) R. T. P. I p. 393
- 9) « . . . moi qui ne pensais plus qu'à ne jamais rester un jour sans voir Gilberte . . . » R. T. P. I p. 399
- 10) R. T. P. I p. 439
- 11) « Car la Berma devait ressentir effectivement pour bien des jeunes hommes ces désirs qu'elle avouait sous le couvert du personnage de Phèdre. » R. T. P. I p. 487
- 12) R. T. P. I p. 493-4
- 13) R. T. P. I p. 494
- 14) R. T. P. I p. 500-1
- 15) R. T. P. I p. 833
- 16) R. T. P. I p. 654
- 17) R. T. P. I p. 655-8
- 18) R. T. P. II p. 10
- 19) R. T. P. I p. 21
- 20) R. T. P. II p. 141
- 21) R. T. P. II p. 254
- 22) R. T. P. II p. 298
- 23) サン＝ルーはここでも「貴族」で「恋人」となる女性を話者と接近させる役割を果たしている。
- 24) R. T. P. II p. 375
- 25) R. T. P. II p. 345-415
- 26) « Bien que ce fût simplement un dimanche d'automne, je venais de renaître, l'existence était intacte devant moi, car dans la matinée, après une série de jours doux, il avait fait un brouillard froid qui ne s'était levé que vers midi: or un changement de temps suffit à recréer le monde et nous-mêmes. » R. T. P. II p. 345
- 27) R. T. P. II p. 398

- 28) R. T. P. II p. 402
- 29) R. T. P. II p. 401-2
- 30) « En attendant Saint-Loup, je demandai au patron du restaurant de me faire donner du pain. « Tout de suite, *Monsieur le baron*. — Je ne suis pas baron, lui répondis-je avec un air de tristesse pour rire. — Oh pardon, *Monsieur le comte!* Je n'eus pas le temps de faire entendre une seconde protestation, après laquelle je fusse sûrement devenu « *Monsieur le marquis* »; » (強調は筆者) R. T. P. II p. 411
- 31) cf. Gaston Bachelard, *La terre et les rêveries du repos*, José Corti, 1963 chapitre 7
- 32) « Le contact avec l'eau comporte toujours une régénération. » Mircea Eliade, *Le sacré et le profane*, Gallimard (idées) 1979 p. 111  
 « On plonge dans l'eau pour renaître renoué » Gaston Bachelard, *L'eau et les rêves*, José Corti 1942 p. 197
- 33) R. T. P. II p. 397
- 34) このことは厳しい試練の後に秘密結社への加入が認められるイニシエーションの儀式を思わせる。貴族社会は決して秘密結社ではないが、この場合話者が危険をくぐり抜けたあと貴族階級への加入が許されることを考えると、そこに類似の構造を見ることができよう。
- 35) R. T. P. III p. 399
- 36) R. T. P. III p. 414
- 37) R. T. P. III p. 566
- 38) « La ville que j'avais devant moi avait cessé d'être Venise. » R. T. P. III p. 652
- 39) R. T. P. III p. 857
- 40) « [ . . . ] ce séjour que je fis à côté de Combray, et qui fut peut-être le moment de ma vie où je pensai le moins à Combray, [ . . . ] » R. T. P. III p. 691